

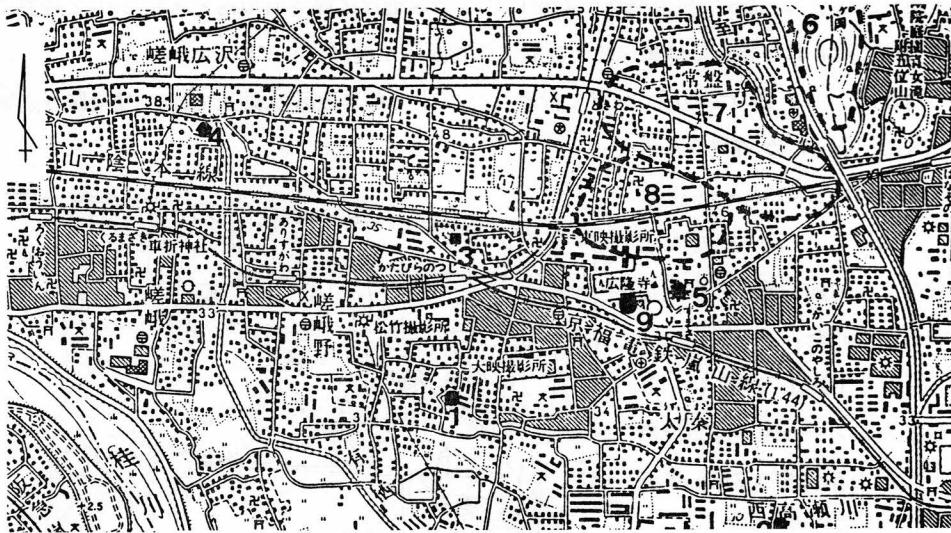
広隆寺出土瓦について

——昭和56年度調査の瓦溜り(S K13下層)出土資料を中心に——

森 下 衛

1. はじめに

広隆寺は、京都市右京区太秦に所在する、山城地方屈指の名刹である。当時の草創については、『日本書紀』による推古11年(603)説、『広隆寺縁起』による推古30年(622)説などがある。また、もと「九条河原里・九条荒見社里」にあったものが「五条荒蒔里」に移されたとも言われる。これら諸説をめぐり、過去に多くの論考が出されたことは言うまでもない。^(注1)ただ、古瓦という面から広隆寺について述べられた機会は少なかつた。出土資料が限られたものであったことがその原因だったように思う。その中で、旧葛野・乙訓郡に分布する軒丸瓦を体系的に取り上げた高橋美久二氏の論考では、広隆寺出土軒丸瓦を含む当地域の軒丸瓦が7世紀前半以降その後半に至るまで高句麗様式という一連の瓦当文様の系譜を保持し続けていることを提示している。^(注2)一方、生産遺跡へ目を向けると、岩倉幡枝地域において窯跡に対する調査・研究が徐々に進展をみせている。そこでは軒瓦の瓦当文様



第1図 広隆寺位置図(1/25,000)

1. 天塚古墳 2. 蛇塚古墳 3. 仲野親王高阜陵 4. 兜塚古墳 5. 弁天島経塚
6. 双ヶ岡古墳群 7. 常盤東ノ町古墳群 8. 常盤仲ノ町遺跡 9. 広隆寺(調査地)

はもちろん、平瓦に施された特異な叩き痕にも注目し、そこから想定される工人像、さらに類似した叩き痕を残す平瓦が出土する生産遺跡(深泥池瓦屋・木野墓窯跡・栗栖野窯跡など)や寺院跡(北野廃寺・北白川廃寺・広隆寺)との関連等が論議されている。このように、広隆寺を含む山城盆地北辺から西辺の寺院跡では、単に個々の寺院での出土瓦の検討にとどまらず、より広範囲な寺院跡・生産遺跡出土品を含めた検討によって、瓦当文様の系譜・瓦の生産体制が明らかにされると考えられる。また、それらの成果によって、改めて各寺院についての古瓦を通してみた解釈も可能となると思われる。

今回、広隆寺出土瓦を観察する機会を得たが、その中には数種類の軒瓦や特異な叩き痕を残す平瓦等があった。そこで、上記の研究がより前進するための一助となればと思い、簡単ではあるがこれらを整理・報告し、その過程で気付いた点を少しまとめてみたい。

対象とする資料は、当調査研究センターが昭和56年度に広隆寺旧境内で行った調査で出土したものである。特に瓦溜り(SK13下層)から出土したものについてみていきたい。なお、この資料は既に報告済みではあるが、今回あらためて、特に平瓦を中心に検討を加えたものである。また、本資料を整理するにあたり、現地調査を担当された石尾政信氏には大変お世話になった、記して感謝したい。

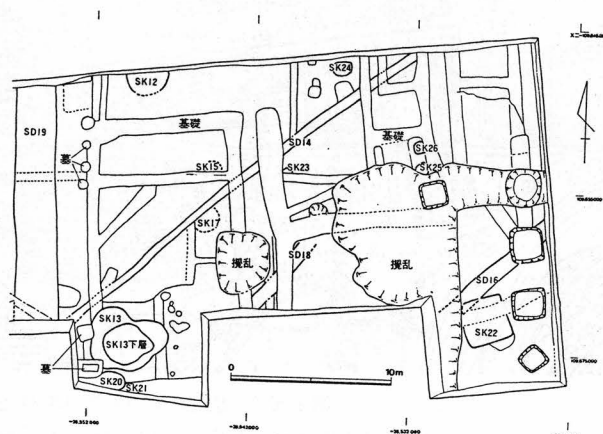
2. 瓦溜り(SK13下層)資料の分類

昭和56年度に、当調査研究センターでは太秦警察署(京都市右京区太秦桂木町蜂ヶ岡31所在)の改築に先立って発掘調査を実施した^(注6)。当該地は広隆寺旧境内と考えられ、過去に周辺地で行われた調査では築地跡・掘立柱建物跡等が検出されている^(注7)。

調査は、A・Bの2地区に分けて行われた。中でもB地区の調査では、梵鐘鑄造遺構(SK22)をはじめ古墳5基・

土器溜り(SK13)・瓦溜り(SK13下層)・溝・土壇など数多くの遺構を検出し多大な成果を収めた。

瓦溜り(SK13下層)は、B地区トレンチの南半部で検出された。南北約2.7m・東西3.3mの不整楕円形を呈し、深さ60~70cmを測る土壇状をなす。土器溜り(SK13)に



第2図 B地区トレンチ平面図

より上方部が破壊されているものの、遺存部分から平瓦・丸瓦を中心として整理箱約50箱近くの古瓦が出土した。

出土古瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼板片などがある。しかし、いずれも小破片となっており、ここでは先述の研究成果との対応関係を考慮し、また比較的分類を行いやすいという面から、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦について整理作業を行った。

(1) 軒丸瓦の分類(第3図)

軒丸瓦は、瓦当文様をもとに分類した。資料数は9点あり、以下の5種類に分類した。なお、分類の形式名・内容は報告書と変わりはないが、一部全体の文様が不明瞭なものについては、過去に出土した既報告資料をもとに記述した。^(注8)

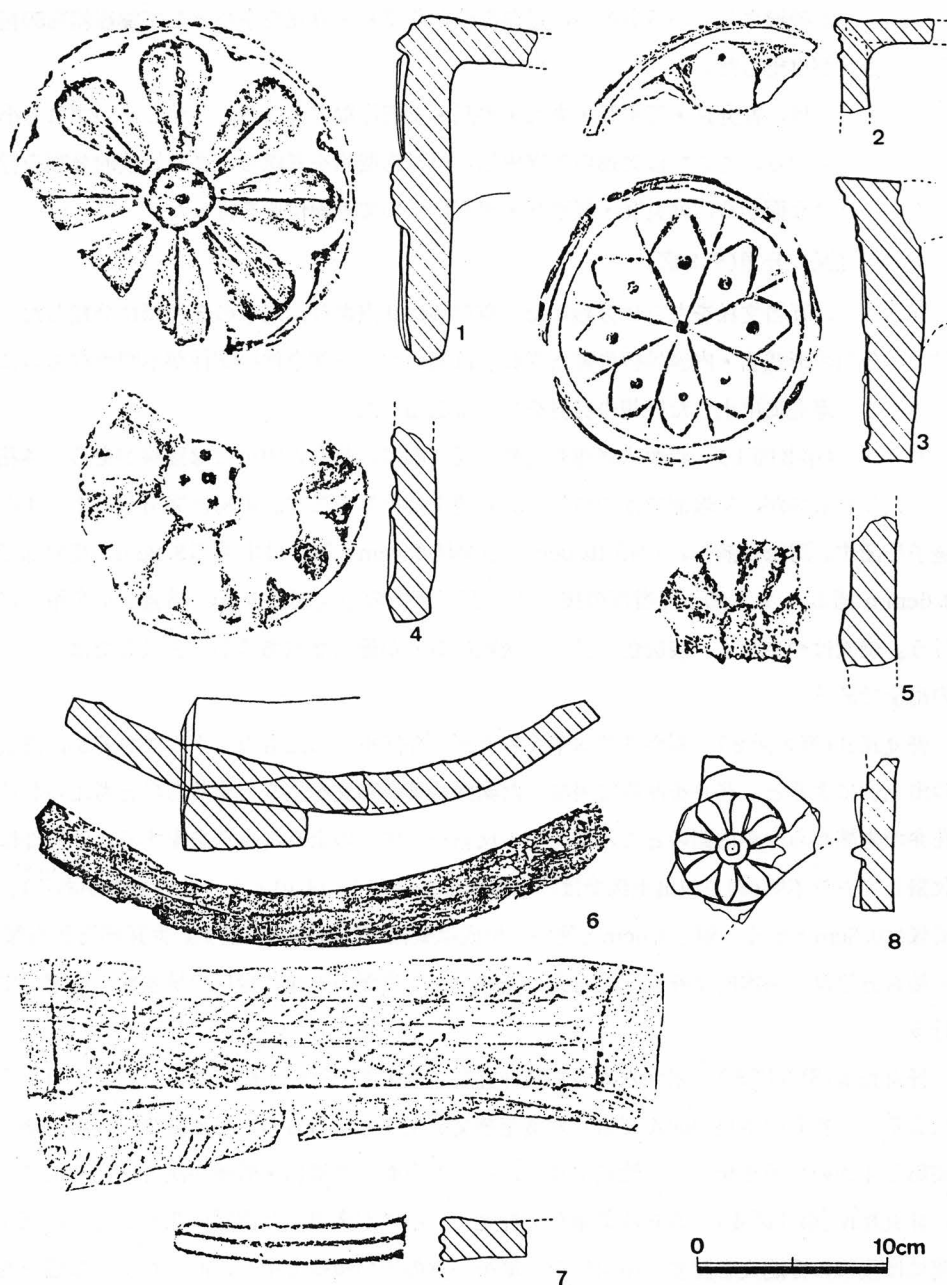
軒丸瓦Ⅰ(第3図1) 素弁八葉蓮華文軒丸瓦。肉厚の花弁の中央には稜線が走る。各花弁は丸みをもつが、先端部ではやや尖る。弁間文は楔形をなす。中房は突出し、1+4の蓮子を配す。周縁は無い。直径19.0cm・中房径4.0cm・厚さは中房部3.2cm・花弁部で2.6cmを測る。丸瓦部と瓦当部の接合は、瓦当裏面上端部に少量の補強粘土を用いて行う。焼成はやや甘く、淡灰色を呈す。同類のものが他に2点あるが、広隆寺では初めての出土である。

軒丸瓦Ⅱ(第3図2) 素弁八葉蓮華文軒丸瓦。今回出土したものは小片であるが、過去の出土例によると、花弁を凹みで表現した素弁八葉蓮華文を主文とするものと考えられる。花弁の先端からやや内側のところに、その反転を示すかのような点珠を配する。中房部は欠損しており不明(過去の出土例では、中房部の蓮子が1のものと1+8のものがある)。^(注9)周縁は0.3cmと低く、幅も0.6cmと狭い。焼成は堅緻で、暗灰色を呈す。丸瓦部と瓦当部の接合方法は、基本的に軒丸瓦Ⅰと大差無く、瓦当裏面上端に少量の補強粘土を用いて行う。

軒丸瓦Ⅲ(第3図5) 素弁六葉蓮華文軒丸瓦。中房部付近の小片である。過去の出土例によると、花弁の中央が凹んだ素弁六葉蓮華文を主文とするものと考えられる。^(注10)中房部は突出し4個の蓮子を配する。焼成は甘く、色調は表面が淡褐色・断面が淡青灰色を呈す。

軒丸瓦Ⅳ(第3図4) 素弁八葉蓮華文軒丸瓦。中央が突出した肉厚の花弁を有し、花弁間には楔形の弁間文を配す。中房はその境を一重の太い圈線で示し、凹んだような感を受ける。そこには、1+4の蓮子を配する。周縁は無い。直径18.5cm(図上復元)を測る。焼成は甘く、淡褐色を呈す。

軒丸瓦Ⅴ(第3図3) 素弁八葉蓮華文軒丸瓦。花弁を線で表現し、その平面形は剣先形をなす。また、その中央には点珠を配す。中房は、各花弁を表現する線の交点に点珠を置くことによって示している。外区には一重の圈線が配され、その外側に細く低い外縁があ



第3図 SK13下層出土軒瓦 (注7から抽出)

1. 軒丸瓦Ⅰ 2. 軒丸瓦Ⅱ 3. 軒丸瓦Ⅴ 4. 軒丸瓦Ⅳ 5. 軒丸瓦Ⅲ
6. 軒平瓦Ⅰ 7. 軒平瓦Ⅱ 8. 鬼板

る。焼成は比較的良好で、暗青灰色を呈す。同類のものがあと2点出土している。いずれも、直径15.0cmを測る。^(注11)

(2) 軒平瓦の分類(第3図)

軒平瓦Ⅰ(第3図6) 素文軒平瓦。平瓦の広端部に幅約6.5cmにわたって粘土を貼り足し瓦当部とする。瓦当面には何等加飾しないが、顎部には後述する平瓦A1類の叩き痕が残り、その上からへら状工具による3条の沈線が重弧文を表すように施される。焼成は堅緻で、暗灰色を呈す。

軒平瓦Ⅱ(第3図7) 重弧文軒平瓦。瓦当部下半を欠くが、遺存部に三重の重弧文が残る。型引きの重弧文である。焼成は甘く、淡灰褐色を呈する。

(3) 平瓦の分類(第4図・付表1)

平瓦は、凸面に残る叩き痕の文様から大きくA～Gの7種類に分け、さらに細分を行った。詳しくは付表1に記した。なお、平瓦は小破片となったものが多く、各分類毎に個体数を明確にできないことから、付表1では一応の目安として破片数を示した。また、出土した平瓦の総数は400片を越えるが、表面の摩滅が著しく観察できなかったものも多く、最終的に229片を対象とした。以下、大まかな分類の内容を示しておく。

《A類》 叩き痕の文様の単位が、X状のものとV状のものとが組み合わさって構成されるもの。X状の交差部に格子を有すもの・有さないもの、またその形態によって、A1～A6に細分した。

《B類》 A類のV状の部分が連続し、鋸歯文状を呈するもの。1種類のみ確認した。

《C類》 いわゆる平行文叩き。やや細かな平行文の叩きを1種類のみ確認した。

《D類》 いわゆる格子文叩きの一群。正格子・斜格子、またその大・小によってD1～D5に細分した。なお、D4はいびつな中型の斜格子(一辺約0.7～1.0mm)として一括したが、細かな形態の差異によってさらに細分しうる可能性がある。

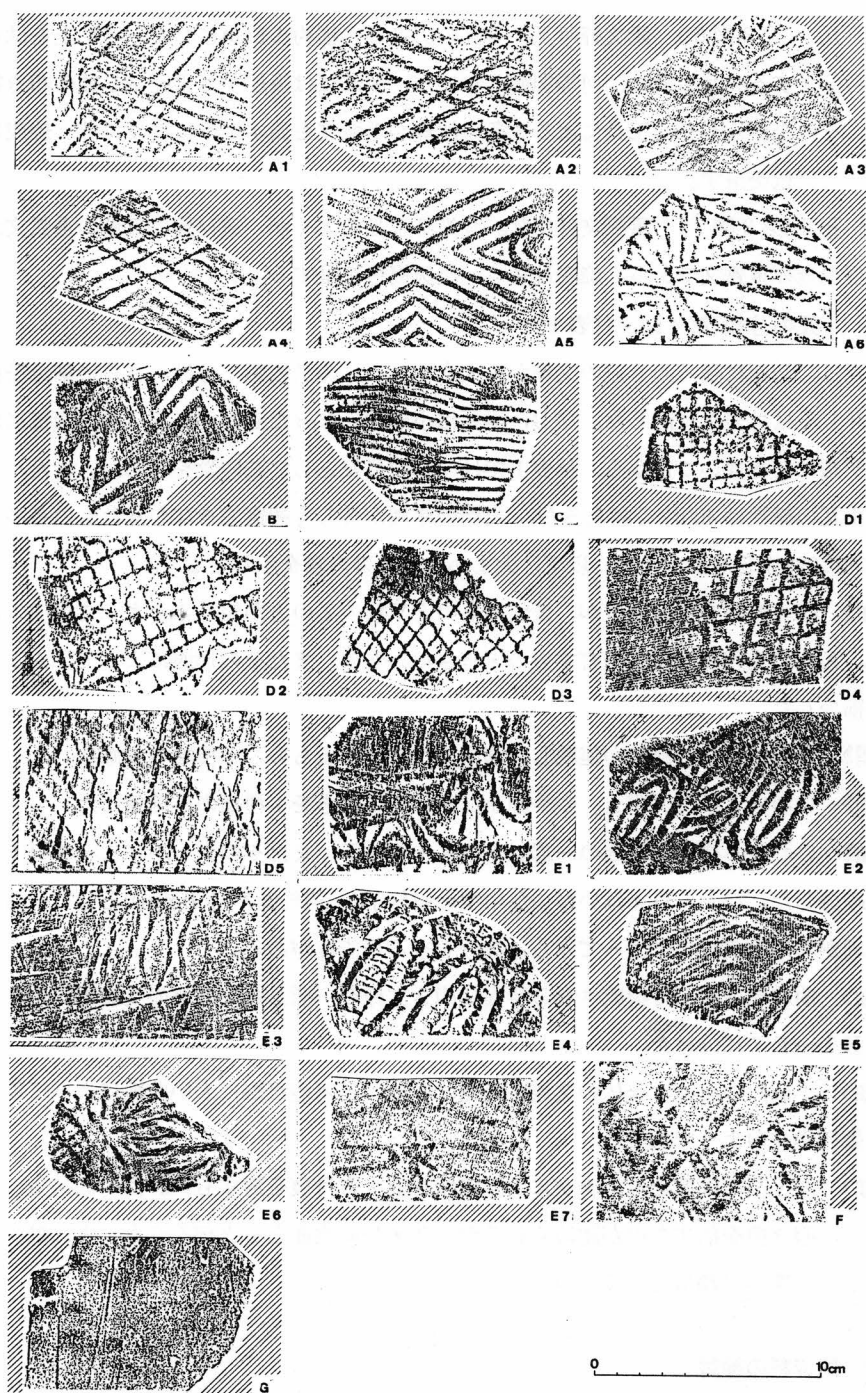
《E類》 曲線を多用して構成される特異な叩き文様を一括した。個々の文様単位毎に細分し、E1～E7に分けた。^(注12)

《F類》 小破片のため、全体の文様を復元するのは不可能だが、太い曲線によって構成された幾何学文のようである。

《G類》 凹・凸の両面とも、ナデによって叩き痕・布目痕を消すもの。他の類にも一部分をナデ、叩き痕を消すものが認められるが、凹・凸の両面ともナデること、また焼成などの面からも確実に抽出できるもの。

3. 同資料の検討

前章で行った分類をもとに、ここではその位置づけ等を中心に少し気付いたところを述べていきたい。なお、軒瓦類については既に述べられている面もあり、ここでは問題点等^(注13)



第4図 平瓦叩き痕の分類

付表1 平瓦の細分 ()内は重複資料数

分類	叩き文様の特徴	焼成・色調	数量
A	1 中心に2×2の格子を有し、比較的整った文様構成をなす。格子の交差角は、約70°を測る。	暗褐色を呈し、硬質な焼きものが多い。	15(1)
	2 中心に2×2の格子を有すが、1に比べ粗雑な文様表現をなす。格子の交差角は、約50°を測る。	淡灰色を呈し、焼成の甘いものが多い。	17(1)
	3 中心に3×3の格子を有し、その交差角は約40°を測る。2と同様に粗雑な文様表現である。	焼成・色調とも2とはほぼ同一。	17(1)
	4 中心に2×3の格子を有し、その交差角は約55°を測る。2・3同様に粗雑な文様表現である。	焼成・色調とも2・3と変わりはない。	12
	5 中心に格子を有さない。整った文様構成をなす。	淡青灰色を呈し、硬質な焼きものが多い。	8
	6 中心で整った交差をなさないが、文様が雑な放射状をなしている。	灰褐色を呈し、焼成の甘いものが多い。	7(5)
B	A類のV字状の部分に類似するが、これが連続して鋸歯状となる。	暗灰色を呈し、硬質な焼きものが多い。	2
C	いわゆる平行文叩き。凹面に同心円の補助叩きが認められる。	須恵質で、暗灰色を呈す。	2
D	1 一辺約5～6mmの正格子叩き。	暗灰色を呈し、硬質な焼きものが多い。	2(2)
	2 一辺約8～10mmの正格子叩き。	〃	10(4)
	3 一辺約5～6mmの斜格子叩き。	〃	3(3)
	4 一辺約7～10mmの斜格子叩き。いびつな形態の格子が多く詳細に検討すれば細分が可能かもしれない。	灰褐色を呈し、焼成の甘いものが多い。	37(6)
	5 一辺約18～20mmの大型の斜格子。	〃	3(3)
E	1 一重の楕円に囲まれた中に×印が配される。	黒灰色を呈し、硬質な焼きものが多い。	2(2)
	2 二重の楕円の中心に棒状の文様を配す。	〃	(3)
	3 楕円と格子の中間のような文様である。表現する線が交差する部分、しない部分があり整っていない。	灰褐色を呈し、焼成の甘いものが多い。	32(7)
	4 E2と類似した文様をなす。文様面に木目の痕跡が目立つ。多くの場合、A6と重複して認められる。	淡黒灰色を呈し、焼成の甘いものが多い。	(3)
	5 曲線によって表現される波状の文様(?)。全体の文様構成はA類に含めるべきかも知れない。	淡灰褐色を呈し、硬質な焼きものが多い。	6(3)
	6 いびつな花卉状の文様が認められる他、詳細は不明。	淡黒灰色を呈し、焼成の甘いものが多い。	1(2)
	7 細長い楕円状のものが左右から延びている文様構成をなす。	乳灰色を呈し、焼成の甘いものが多い。	2
F	太い直線が交差する幾何学文の一部と考えられる。	黄灰色を呈し、焼成の甘いものが多い。	3
G	凸面を縦方向に撫でて叩き痕を消すもの。	黒灰色を呈し、硬質な焼成のものが多い。	2

について簡単に述べる事とし、平瓦についての検討に重点を置くこととする。

(1) 軒瓦について

まず、軒丸瓦についてみていこう。

軒丸瓦が大きく2系統のものに大別できることは、既に指摘されているところである。いわゆる高句麗様式としての特徴をもつ軒丸瓦Ⅰ・Ⅲ・Ⅳと、いわゆる百済様式としての特徴をもつ軒丸瓦Ⅱ・Ⅴである。^(注14) また、軒丸瓦ⅠからⅢ・Ⅳへ、軒丸瓦ⅡからⅤへそれぞれ瓦当文様が受け継がれていることも述べられているが、大方認めうるものと考えている。

中でも、軒丸瓦Ⅰが広隆寺において確認された意義は非常に大きい。その瓦当文様の類似性から、従来、北野廃寺から広隆寺そして檜原廃寺へと受け継がれたと理解されている高句麗様式軒丸瓦の系譜の中で、北野廃寺から広隆寺への流れをよりスムーズなものとし得る資料とできるからである。北野廃寺例と軒丸瓦Ⅰは、詳細に観察しないとほぼ同范ではないかと思えるほど酷似している。時期的にみても、さほど隔たりのないものと理解され、両寺院の創建時期の近似性も指摘できるものである。

また、この軒丸瓦Ⅰを含む今回の高句麗様式軒丸瓦と、過去に出土した既報告の資料とを合わせて整理してみると、以下の大まかな3段階の変遷を遂げたことが推測される。

- (1) 北野廃寺とほぼ同一の文様を有し、山城盆地では最古形式に属するもの(軒丸瓦Ⅰ)
- (2) 基本的に①の文様構成を受け継ぐが、表現が粗雑化するもの(軒丸瓦Ⅳなど)^(注15)
- (3) 花卉が六葉となるなど、さらに文様が簡略化するもの(軒丸瓦Ⅲなど)^(注16)

そしてそこでは、(1)段階に北野廃寺、(2)段階には檜原廃寺の軒丸瓦との関連性も指摘できると考えている。^(注17) 即ち、上記の北野廃寺・広隆寺・檜原廃寺において展開する高句麗様式軒丸瓦の系譜の様相が、これら資料を追加することによって、より明瞭になるのである。

一方、ここでは百済様式と考えられる軒丸瓦Ⅱ・Ⅴの存在にも注目される。特に、軒丸瓦Ⅴは今回初めてその実像が把握された資料である。この軒丸瓦Ⅱ・Ⅴは、ⅡからⅤへと瓦当文様が変化しながら、上記の高句麗様式軒丸瓦とほぼ併行して用いられていた可能性が指摘できるものであり、広隆寺では高句麗・百済の両様式の軒丸瓦がセットで使用されていたことになる。この両様式のセット関係は、北野廃寺でも認められるものである。百済様式軒丸瓦における広隆寺例と北野廃寺例の瓦当文様の系譜は高句麗様式のように良好に語れる訳ではないが、このセット関係も北野廃寺から広隆寺へ受け継がれた要素と位置づけできるかも知れない。

なお、これら軒丸瓦の年代は、具体的に示しうる段階には達していない。大まかに、これら軒丸瓦の使用された時期の上限は、軒丸瓦Ⅰと北野廃寺例との関連から7世紀前半頃と、またその下限は当寺に山田寺式単弁蓮華文軒丸瓦や川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦が新た^(注18)^(注19)

な様式の軒丸瓦として導入されたであろう7世紀後半ないしは末葉頃と推察しうるにすぎない。そこで以下では、軒平瓦の検討を兼ね、大まかな推論として軒丸瓦と軒平瓦のセット関係にまで立ち入ったうえで、先に示した高句麗様式軒丸瓦の3段階の変遷に対して、およその年代を推定してみたい。

軒平瓦Ⅰは、既に指摘されているように、軒平瓦出現期の特徴をもち、同様の特徴を有す檜原廃寺例と合わせ7世紀中葉の年代が与えられている。ではまず、檜原廃寺例との類似性を認めつつこれら軒平瓦の年代を再検討してみよう。

重弧文軒平瓦ではあるが、軒平瓦Ⅰと同様の叩き(A類の叩き)を軒平瓦Ⅰと同じ顎部に施す点で非常に類似性が認められる軒平瓦が、木野墓窯跡で出土している。両者の違いは、軒平瓦Ⅰが瓦当面を素文とし顎部に重弧文状の条線を施すのに対し、木野墓窯例は瓦当面に重弧文を施すという点である。型的には、前者が後者の直前に位置づけうものとして理解できるだろう。後者に、伴出した須恵器から7世紀第Ⅲ四半期の年代が与えられていること^(注20)から、軒平瓦Ⅰにそれよりやや先行する時期として7世紀中葉の年代を与え、檜原廃寺例など軒平瓦出現期の資料をもこの頃のものとするとは充分妥当性を持っているといえる。

続いて、それらとの関連から軒丸瓦の年代を考えてみる。

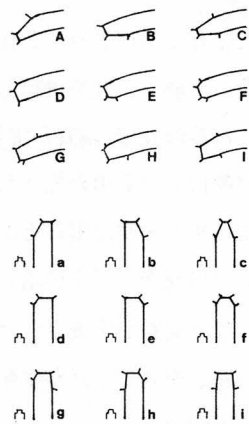
檜原廃寺では、この軒平瓦とセット関係をなす軒丸瓦は、軒丸瓦の顎部にスタンプされた文様から、(2)段階の軒丸瓦と類似性が指摘できる高句麗様式重弁蓮華文軒丸瓦と呼ばれるものである^(注21)。恐らく、檜原廃寺の重弁蓮華文軒丸瓦と広隆寺の(2)段階とした軒丸瓦は、共にここで述べている出現期の軒平瓦とセット関係をなし7世紀中葉の年代を与えうであろう。そうすると、(3)段階とした軒丸瓦は、これに続く7世紀後半という年代がおのずと与えられる。先の木野墓窯跡では、重弧文軒平瓦と共に山田寺式単弁蓮華文軒丸瓦が出土している。あくまで、木野墓窯跡は7世紀後半に北白川廃寺へ瓦を供給したと考えられているが、同様に広隆寺でも山田寺式単弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、広隆寺において(3)段階とした軒丸瓦と山田寺式単弁蓮華文軒丸瓦とは共に7世紀後半に共存していた可能性は非常に高いと考えられる。そして、セットとなる軒平瓦は重弧文軒平瓦であり、今回の軒平瓦Ⅱであったと考えることも可能ではないだろうか。^(注22)

いずれにしても窯跡などの調査・研究が進展し、伴出する須恵器などからその確実な年代や、軒丸瓦・軒平瓦のセット関係などが把握されることを待つほかないだろうが、ここではこのような把握も可能ではないかという事例を示した。

(2) 平瓦について

まず、平瓦の各破片毎に幾つかのデータを作成したが、資料的に限られたものであるこ

い。ただ、幅1cm以上にわたってしっかりと角を削り取り面取りを施す例(第6図A～C, a～c)はごく僅かで、しかも各隅部付近という限られた部位でのみ確認できるにすぎない。大半のものは、幅約0.5cm程度の面取り(同図D～F, d～f)か、その面取りと幅1cm以上削るにしても単に面を揃える程度のもの(同図G～I, g～i)である。この傾向は、A・B・D・E・F類の計20種類において認められる。ただし、C・G類はこれらから明確に分離され、いずれも数量的には僅かだが隅部付近ではない側面の形態がC類では第6図Cの、G類では第6図Aの形態を示している。



第6図 側面・端面の形態模式図

以上、簡単に平瓦相互の関係について述べたが、そこでは、A・B・D・E・F類に属す計20種類のものが、およそ同様な手法に因るものであり、C・G類の2種類のものが、それらから明らかに分離しうるものであること、うち少なくとも、A・D・E類に属す計15種類のものは、確実に同一の工房で同一時期に生産されたものであり、しかもそこで使用されていた叩き文様に対応する15種類の叩き具は、その文様の分類毎つまりA・D・E類に属するものそれぞれに使用状況に差異が認められることが明らかとなった。

なお、C・G類の製作技法は、他のものに比して比較的丁寧なものと理解できる。この点、他の20種類の叩きを有す平瓦より先行するものとしうる可能性が高いと考えている。

② 平瓦の生産状況・供給状況について 続いて、周辺の寺院跡・生産遺跡の調査成果を踏まえながら、これら平瓦の生産状況・供給状況について検討し、幾つかの問題点を提示してみたい。^(注24)ではまず、窯跡出土資料をもとに、これらの生産状況について見てみよう。

現在までのところ、広隆寺へ瓦を供給したと考えられる窯跡は未確認である。しかし、それらが存在すると推測しうる最も可能性の高い場所は岩倉幡枝近辺と考えられる。この地域では、7世紀前半期に北野廃寺へ瓦を供給したイナリ窯跡をはじめ、近年の調査によって北白川廃寺へ瓦を供給したと考えられる木野墓窯跡や深泥池瓦屋の様相が明らかとなってきた。あたかも、当地方は山城盆地北辺の寺院跡に瓦を供給した、一大生産地であった様相を呈しはじめている。この地方で生産された平瓦をみると以下のものがある。

幡枝イナリ瓦窯では、格子叩きを施した平瓦が生産されていた。出土した軒丸瓦から7世紀前半に位置づけられ、北野廃寺へ瓦を供給していたことも確認されている。

軒瓦の項でも再三触れた木野墓瓦窯跡では、広隆寺A類と酷似した叩きを施すものを中心に、B類と類似する鋸歯文状のものや綾杉文状のもの、クモの巣状のものなどが施され

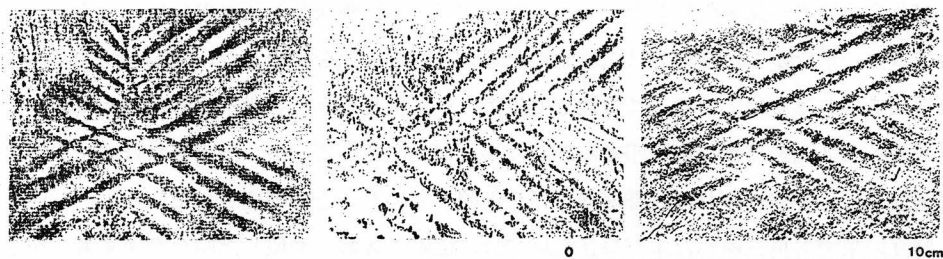
た平瓦が生産され、共伴した須恵器から7世紀第Ⅲ四半期に位置づけされている。また、北白川廃寺へ瓦を供給していたことが確認されている。

深泥池瓦屋(調査が実施されたケシ山窯)では、格子叩きを中心に、一部に綾杉文やA類に酷似したものが施された平瓦が生産されていたことが確認されている。出土した軒丸瓦や、平瓦・須恵器などから大まかに7世紀後半の年代が与えられている。また、報告では北白川廃寺へ瓦を供給していたらうと考えられている。

最近調査が実施された栗栖野窯跡では、A類と類似するもの、鋸歯文、綾杉文の3種類の叩きを施す平瓦が生産されていたとのことである。瓦を供給した寺院跡は、現在のところ不明であるが、共伴した須恵器から7世紀第Ⅳ四半期の年代が与えられている。

このように、広隆寺資料中にあった格子叩き(D類)やA類とした叩き、B類とした叩きと、同一のものは明らかとできないが、^(注25)少なくともそれに極めて類似したものを施した平瓦が生産されていたことは明らかである。換言すれば、当地域ではこれらの叩きを施す平瓦が徐々に窯場を変えながら生産され、それを山城盆地北辺の各寺院へ供給していたと考え得るのである。現在までのところ、その内容が明らかとされた窯跡は上記のものに限られるが、今後調査が広範囲に及べば、広隆寺へ瓦を供給した窯跡もいずれ確認されるだろう。さらに上記の窯跡の成果からは、現時点で格子叩きというのは7世紀前半のイナリ窯以来、7世紀後半のケシ山窯に至るまで受け継がれた叩き文様であるのに対して、A類及びそれに類似する叩きとした一群は7世紀後半を中心とする時期に新たに使用が始まったものと推測され、本平瓦資料も、大半はおよそこの7世紀後半頃に生産されたと考えられる。そこで、今少し現在までに確認された資料からA類と類似した叩きが使用されたであろう時期を整理し、本平瓦資料の年代についてもおよそのアウトラインをひいておこう。

現在のところ、木野墓窯例のなかで、広隆寺資料中のA1～A4に酷似したもの(第7図)を中心とした一群の年代は7世紀第Ⅲ四半期とされている。また、栗栖野窯資料は中央に格子をもたず、×部の交差角がやや小さくなる傾向を示すものだが、これが7世紀第



第7図 木野墓窯出土のA類叩きの例(左から木野墓A1, A3, A5)

Ⅳ四半期とされている。これらの資料からは、およそ中央に格子をもつものから、格子をもたず交差角が小さくなるものへと文様が変遷し、それが7世紀後半期に進行したと考えられるようでもある。これに対し、広隆寺資料中のA1～A4とそれと類似する木野墓窯例とを比較すると、先に軒平瓦の項でみたようにA1が木野墓窯例より先行する要素を有しつつも、叩き具合や文様の精緻さ等からは木野墓窯例がやや先行的な要素を有しているようでもある。^(注26) また、木野墓窯例からケン山窯例への型的な変化を認めた場合、広隆寺資料中のA6としたものは文様のくずれたものであり、文様構成からいえばA1～A4などからすると一ないし二段階ほどは後出的なものと理解される。しかし、実際はA1・A2・A4とA6は重複関係によってその同時性が確認できたのである(この点に関して、重複関係の項でもみたようにこのA6はA類の中ではやや性格を異にしているようでもある)。このように一応型的な変化は認められそうではあるが、その細かな変化過程を明確に示すのはいまだ困難な状況にあり、今後より多くの資料の検討を待たねば速断できない状況にあるといえる。ただ現在確認されている例からみると、A類に類似する一群の叩き文様は、およそ7世紀中葉～後半期のなかで理解できるものであることは確実であり、本平瓦資料はこの中でも古い一群に位置づけできるのではないかと考えている。

またここで注目されるのは、木野墓窯跡の報告で述べられているように、^(注27) D類とした格子叩きを施した平瓦を中心に生産していた工人、A類に類似した叩きや鋸歯文、綾杉文状の叩きを施した平瓦を中心に生産していた工人というように、それぞれ叩き文様は一定のグループ毎にある程度異なった瓦工集団に対応すると考えられることである。実際、先に示した4例の窯跡でも、それぞれが入り混じった状況はなく、およそ窯跡毎に生産された平瓦の叩きはまとまりを有していた。

このようにみると広隆寺資料中にみた数多くの叩きも、D類とした格子叩きの一群、A類とした叩きと上記の木野墓窯跡や栗栖野窯跡の例からこれと同グループとなると考えられるB類(鋸歯文)の叩き、そしてその他のE類・F類とした叩きといった具合に少なくとも3～4系列以上の瓦工集団に対応するものが混在することとなる。しかし、先述のように実際のところ広隆寺では、重複関係の検討によって、そのうちいくつかの叩きは同一の工房で同時に使用されていたことを確認したのである。この状況は、本来は独立して生産活動を行っていたと思われる3～4系列以上の工人集団が、何等かの要因により同一の工房内に再編成された上で広隆寺に瓦の供給を行っていたことを推測させる。同一工房内で使用されていたと考えられる叩き工具(A・D・E類)が、その文様毎に使用形態に差異が認められたという点は、このことを示唆しているようでもある。^(注28)

このように生産遺跡出土資料からいくつかの検討を行い問題点を抽出してみると、以下

の点が上げられる。

- (1) 今回対象とした平瓦はおそらく岩倉幡枝地域のいずれかで生産されたと推察される。
- (2) 少なくとも、C・G類を除く他のもの(A・B・D・E・F類)は7世紀後半頃に岩倉幡枝地方に存在した3～4系列以上の工人集団の生産によるものと考えられた。
- (3) その生産に携わっていた工人集団は、本来は独立して窯場を経営していたが、何等かの理由で同一の工房に再編成された上で瓦の生産を行っていたのではないかと推察された(確実なのは重複関係の確認されたA・D・E類ではあるが、手法等からすればB・F類なども可能性が高い)。

では次に、消費地である寺院跡出土資料の検討からその供給状況について考えてみる。

特異な叩きの類例は、北野廃寺や北白川廃寺で認めることができる。両寺院とも、先にみたように岩倉地方の窯跡から瓦が供給されたことが確認されている寺院跡である。これら寺院跡では、いずれも平瓦の多くは格子叩き・平行叩きを施すものによって占められている。しかし、北白川廃寺では非常にバラエティーに富む特異な叩きを施す平瓦が確認されている。主なものだけでも、人面文・日輪文と称されるものをはじめ、円弧と直線を組み合わせたもの、A類と類似したもの、B類と同様の鋸歯文状のものなどがある。また北野廃寺では、あまり多くの資料は報告されていないが、A類と類似するもの、E5と類似するものをはじめ、幾何学文状のもの(F類に類似する)などがある。

これら消費地では、まず格子叩きや平行叩きと特異な叩きを施した平瓦の絶対量の差が指摘できよう。これは、平行文叩きの平瓦については今のところ明確ではないが、格子叩きと特異な叩きの平瓦については、先にA類を例にあげたように生産された時期に違いがあることがひとつの要因としてあげられるのではないだろうか。また、同一の工房で生産されたと考えた資料においても格子叩きと特異な文様の叩きでは、常に格子叩きが優先的な使用状況にあったことも、格子叩きの平瓦の量的な優越性、さらにはその工人の優越的な立場をも暗示していると考えられよう。^(注29)

また、先に異なった工人集団に対応するのではないかと考えた叩き具の文様のグループ毎では、明らかに供給状況の差異が認められるのである。格子叩きは広隆寺は勿論、北野廃寺・北白川廃寺のいずれでもある。それに対し、A類(B類を含む)は広隆寺・北白川廃寺で認められる(注でも示したようにE5類の文様構成が本来的にA類に含めるべきものであるから実際北野廃寺でもA類は存在することとなる)。E類は現在のところ広隆寺でのみ認められるものであり、F類は明確な例ではないが類似したものが北野廃寺で認められるという具合にである。

これは、(1)各寺院の創建時期と、岩倉地方で平瓦生産を行っていた工人集団がその時期

いずれの叩き工具を使用する集団であったかという时期的な問題、(2)叩き工具の文様毎に、各寺院へ同系列の叩きを施す平瓦を供給していた工人、特定の寺院へ平瓦を供給していた工人という供給状況を異にする集団の存在という問題^(注30)のいずれかか、もしくは両方に影響されたものと考えられる。

4. ま と め

以上、広隆寺出土瓦(SK13下層)について、「はじめに」で示した意図からそれらについて再検討を行うつもりで述べてきた。そして、以下の作業を行った。

(1) 軒瓦について、瓦当文様から一定の整理作業を行い、当寺院の7世紀前半～後半期の資料がある程度整いつつあることを強調した。また、そこからそれらを体系的に把握すべき段階にあると感じたことから、およその年代についての推論を提示した。

(2) 平瓦についても、叩き文様から一定の分類作業を行い、その生産状況・供給状況などについて考えてみた。特に、本瓦溜り資料中に多く認められた、一般に特異な叩きと称されている叩きが施された平瓦は、従来より周辺の寺院跡・瓦窯跡で出土例の報告はあったものの、それを体系的に捉える作業はあまり行われていなかったものである。

その結果、軒丸瓦からみた成果としては、当寺の創建時期が7世紀前半まで遡ることが明らかとなった点があげられる。そこには当然、北野廃寺との関連という問題がうかび上がってくるだろうが、両者は非常に酷似した軒丸瓦を用いて、あまり时期的な隔たりの無いうちに建立されたと考えられた。従来、『日本書紀』に名を遺す「蜂丘寺」をめぐって、広隆寺と北野廃寺のいずれがその遺跡であるのかが問題となってきた。それが、近年の調査成果によると、もともと北野廃寺の地に建立された「蜂丘寺」がその寺域の狭さから現広隆寺の地へ移建されたと考えることが最も妥当性を有しているようである。その点を考慮すれば、その移建が北野廃寺の創建後、比較的短期間の内に行われたことを、今回の整理作業の成果は示しているといえるだろう。

また瓦当文様の点からみれば、高句麗様式素弁蓮華文軒丸瓦は、従来から言われているように、山城盆地西～北辺に分布する飛鳥～白鳳時代の寺院跡から出土する軒丸瓦の変遷の中で非常に重要な位置を占めることを改めて確認した。当地域最古と考えられている北野廃寺から受け継がれた軒丸瓦Ⅰをはじめ、それから変化していくと考えられた軒丸瓦Ⅳなどはその後山城盆地西辺に展開する重弁蓮華文軒丸瓦(檜原廃寺出土品など)との関連も考えられるのである。しかも、それが高橋氏の述べたように極めて在地的である点^(注31)、当地域独自に軒丸瓦の瓦当文様を創作した工人を想定すべきだろう。

平瓦からみた成果としては、本資料の多くが7世紀中葉～後半に岩倉幡枝地方で生産さ

れたものである可能性の高いことが上げられるだろう。また、同一の工房で同一時期に生産されたものが多く認められたことも注目される。確実なものは22種類のうち15種類であったが、その製作技法などからは20種類のものが可能性の高いものとできるだろう。しかもその生産体制を考える過程で、本資料が生産されたであろう岩倉幡枝地区の瓦生産を概観したところ、本来は独立して窯場を経営し、その供給状況にも差異が認められる3～4系列以上の工人集団の存在が想定され、広隆寺へ瓦を供給した際（少なくとも本資料を供給した際）、それら工人集団は同一の工房へ再編成された上で瓦生産を行っていたと推察されるに至った。

最後に本瓦溜りの性格であるが、資料中に軒瓦は7世紀前半～後半と考えられるものがあり、また平瓦には一部のやや先行的なものを含むが大半の資料は7世紀中葉～後半と考えられるものが認められた。つまり、ここには当寺院の創建時期に近いと考えられる頃から7世紀後半までという比較的まとまった時期の資料があったと言える。瓦の耐久年数からみれば、これらの資料は、その下限である7世紀後半頃にいずれかの堂宇の屋根に使用されていた瓦の一部という位置づけもあながち無理なことではないだろう。^(注32)

しかしこれらの正確な位置づけをするには、まだまだ良好な資料が不足していると言わざるをえないのである。とりわけ平瓦についての内容は、窯跡の調査成果からの研究が緒についたばかりの状況である。今後、より多くの資料が増加し、これら資料に再評価が下されることを期待したい。^(注33)

なお、資料整理の段階から多くの有益な御指導を賜った五十川伸矢・菱田哲郎の両氏をはじめ、資料の実見に便宜を図っていただいた梅川光隆・中村淳司・北田栄造、挿図等の作成に協力を願った田中智子・桂 智美・石原俊子の各氏には末筆ながら感謝の意を表すとともに、その御厚意に報えず不十分なものとなった点、深くお詫びする次第である。

(森下 衛＝当センター調査課調査員)

注1 ①喜田貞吉「山城北部の条里を調査して太秦広隆寺の旧地に及ぶ」(上)・(下)『歴史地理』25-1・2) 1915

②梅原末治「広隆寺礎石及び古瓦」『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府) 1919

③梅原末治「太秦広隆寺」『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊 京都府) 1923

④石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936

⑤田中重久『聖徳太子御聖蹟の研究』1944

⑥向井芳彦「広隆寺草創考」(1)～(4)『史迹と美術』229～232) 1953

注2 高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」『史想』第15号 京都教育大学考古学研究会) 1970

注3 ①『ケシ山窯跡発掘調査概要報告』京都市埋蔵文化財調査センター 1985

- ②「岩倉踏査報告Ⅴ」(『トレンチ』34 京都大学考古学研究会) 1984
- ③第7回調査成果交流会(於 向日市文化資料館)での北田栄造氏の発表
- 注4 注3①文献中で、ケシ山窯跡を含んだその一帯の窯跡群をこう呼んでいる。
- 注5 石尾政信「広隆寺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注6 以下の調査成果についての記述は、注5文献による。
- 注7 浪貝 毅「北野廃寺と広隆寺旧境内」(『仏教芸術』116) 1978
- 注8 ①『京都市の埋蔵文化財』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977 を主に参考とした。
②(財)京都市埋蔵文化財研究所保管の広隆寺出土古瓦(1981年度調査資料)を実見させていただいた。
- 注9 ①奈良国立博物館『飛鳥・白鳳の古瓦』東京美術 1978
②平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1982
③注1④文献
- 注10 注8①文献 p.24-55
- 注11 本例は注1④文献に平安時代の資料として報告されていたものであるが、今回改めてその実態が把握でき、7世紀中葉～後半頃の資料と確認できた。
- 注12 注8②によって、E5類の文様構成は曲線を使用しているが基本的にA類に含めるべきものでX・Vの屈曲・交差部分が曲線的に表現されたものであることを確認した。ここでは一応E5類として報告するが本来はA類に含めるべきものである。
- 注13 注5文献による。なお、ここで注5において述べられている軒丸瓦・軒平瓦についての所見を簡単にまとめておこう。
基本的に軒丸瓦は2群に分かれると考えられている。古式に属する軒丸瓦Ⅰ・Ⅱとそれから文様が退化したと考えられる軒丸瓦Ⅲ・Ⅳ・Ⅴである。前者を7世紀前半、後者を7世紀中葉～後半頃と判断されている。また、軒平瓦Ⅰを軒平瓦出現期の資料ととらえ7世紀中葉頃のものとしている。そして本文で後述するように、注3文献に述べられている北野廃寺一広隆寺一檜原廃寺へと流れる瓦当文様の変遷の中にあてはめ、北野廃寺から広隆寺のルートに軒丸瓦Ⅰ・Ⅳを、広隆寺から檜原廃寺のルート上に軒平瓦Ⅰを想定している。
- 注14 以下に述べる高句麗様式・百濟様式という概念は下記の文献に拠る。
①石田茂作「古瓦より見たる日鮮文化交渉」(『仏教考古学論叢』1931
②藤沢一夫「摂河泉出土古瓦様式分類の一試企」(『同上』)
- 注15 注8①文献 p.24-57
- 注16 注8①文献 p.24-55・56・58
- 注17 (1)段階の軒丸瓦と北野廃寺出土軒丸瓦との関連については本文中に述べたが、(2)段階とした軒丸瓦(注8①文献 p.24-57)などは花卉の表現や、当寺院出土軒丸瓦の中で唯一周縁を有している点など檜原廃寺出土軒丸瓦との類似性が認められる。
- 注18 北野廃寺例はその瓦範がもともと宇治隼上り瓦窯で使用されていたが、短期間の間に岩倉幡枝イナリ窯へ移動したと考えられている。その年代は伴出した須恵器から7世紀前半頃と把握されている。
- 注19 当寺院出土の山田寺式単弁蓮華文軒丸瓦や川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦については下記の文献を参考とした。
『北野廃寺跡発掘調査報告』六勝寺研究会 1978；注3①文献；注9②文献
- 注20 注3②文献と同じ
- 注21 佐藤興治「檜原廃寺発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会) 1967

- 注22 ここでは山田寺式単弁蓮華文軒丸瓦は出土していないが、注7②によると同一の土坑（瓦溜り）内から両者が出土している。後述する本瓦溜りと同様の性格（注32）をその土坑にもあてはめうるものとすれば、この大胆な推論もあながち無理なものとは言えないだろう。
- 注23 注3②文献では、ある一定のグループをなす叩き痕毎に異なった工人集団の生産によるものと理解され、木野墓窯跡出土の主体を占める特異な叩きを用いた工人集団がその他の格子叩きを用いた工人集団とは別に岩倉幡枝地区を中心に生産活動を行っていたとされている。
- 注24 以下、各窯跡・寺院跡出土資料についての記述には下記の文献を参考とした。
梶川敏夫「北白川廃寺塔跡第2次発掘調査概要」（『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』北白川廃寺発掘調査団・京都市文化観光局文化財保護課）1975；「北野廃寺発掘調査報告書」（『京都市埋蔵文化財調査報告』第7冊（財）京都市埋蔵文化財研究所）1983；『北野廃寺跡発掘調査報告』（注19文献）；注3①～③
- 注25 極めて酷似するものはあるが、同一のものは無い。
- 注26 両者は非常に酷似している。しかも本資料中のA1～A4がそれぞれ対応するように木野墓窯例中にもこのタイプが4例認められ、あたかも一方が摩滅した後に彫りなおして使用したとも思えるほどである。ただ、今回実見した限りではその可能性は低いようであった。
- 注27 注23と同じ
- 注28 当然同一工房に再編成されたとしても、その製作過程の差異は認められるであろう。それが今回の整理作業によって明らかとなった叩き具の使用状況の差異である可能性は高いだろう。
- 注29 ここでいう工人の優越的な立場というのは、格子文様の叩き具の使用されていた期間・同一工房内での使用状況から推測された優先性などから想定されるもので、本文様の工具を使用していた工人が当地域の瓦生産において中核的な立場を担っていたであろうことを指す。
- 注30 北白川廃寺の特異な叩き痕を残す平瓦の中にも広隆寺E類と同様に北白川廃寺でしか認められない一群がある。これも今回確認したものとは別系列の工人集団の存在を示唆するものといえよう。梶川敏夫「北白川廃寺塔跡第2次発掘調査概要」（注24文献）
- 注31 注2と同じ
- 注32 下記の文献でも述べられているが、瓦溜りも、大きくは2種類に分けて考えられるようである。一つは、後世の畑作などの際周辺に散在する古瓦をまとめて埋めたものなどである。また一つは、周辺の何等かの建物が倒壊した際に落下した瓦類などをまとめて穴に埋めたものである。前者はそこにある古瓦類にかなりの時期幅が認められ、使用されていた建物もまったく推定することはできない。しかし後者の場合、その建物が倒壊した時期に使用されていた瓦類がまとまっていると考えられる。つまり使用場所・使用時期のある程度限定された資料が得られるのである。本瓦溜りは、この後者に属す可能性が高いと考えている。『京都大学埋蔵文化財調査報告』第1冊 京都大学埋蔵文化財研究センター 1978
- 注33 現在のところ、彼ら幾種類かの工人集団の足跡すら明確に追えない状況である。まして、その生産活動の中での特異な時期といえる本平瓦資料の生産段階の様相などまだまだ多くの問題点を解決せねばならないだろう。また、これら特異な叩きの類例は、単に山城西～北辺に限らず他所でも確認されている。例えば、山滝寺跡（京都府宇治市原町）などでも確認されている（菱田哲郎氏教示）。また、大阪府柏原市所在の鳥坂寺跡（『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府教育委員会 1968）・大県遺跡（『大県・大県南遺跡』柏原市教育委員会 1985）・大県南遺跡（『大県南遺跡』柏原市教育委員会 1985）などでも報告されている。それらを含め今後充分な検討が必要である。